第 17 話　80 年代のアイドル映画、そして原田知世の時代

●作品的に高く評価された松田聖子の『野菊の墓』

さて、「たのきん」たちジャニーズ系の男性アイドルに対し、80 年代の音楽界での女性アイドルといえば、松田聖子を挙げなければなるまい。

80 年に「裸足の季節」で歌手デビューした彼女は、2 作目の「青い珊瑚礁」がヒットし、3 作目の「風は秋色」から 88 年の「旅立ちはフリージア」までの 24 曲が連続でヒットチャート 1 位になるという驚異的な人気を誇った。NHK 紅白歌合戦にも 80 年から 88 年まで 9 年連続で出場、その後も 2014 年に至るまで断続的に出場を重ね総計 18 回を数える。

映画には、東映『野菊の墓』（81 澤井信一郎　脚・宮内婦貴子　原・伊藤左千夫）で主演デビューした。原作が文芸作品で、『野菊の如き君なりき』（55 木下惠介）、『野菊のごとき君なりき』（66 富本壮吉）に続く 3 度目の映画化というところ、前々作が松竹で新人として嘱望されながら早くに映画界を去った有田紀子、前作が当時の大映が売り出そうとしていた安田（現・大楠）道代と期待の新人女優が起用されたところ、そして相手役の政夫を演じた桑原正を選ぶために 2 万人の一般公募オーディションが行われたところ、すべて山口百恵の『伊豆の踊子』での映画デビューを想起させる。

違うのは、初主演の百恵をベテラン西河克巳監督が指導したのに対し、こちらは新人の澤井信一郎監督が担当したことである。澤井は、同世代の助監督たちが監督昇進しても時機を待って辞退し、巨匠マキノ雅弘監督の愛弟子であることや大ヒットシリーズ『トラック野郎』（75～79 鈴木則文）のシナリオで知られた名物助監督だった。その澤井がアイドル映画をどう撮るか、ひそかに注目する向きも一部にはあった。

撮影現場報道でヒロイン民子に扮した聖子の写真を見て、驚いたファンは多かったろう。「聖子ちゃんカット」と呼ばれ大流行した前髪が眉にかかり肩口の毛先を軽くカールさせるトレードマークの髪型とは、似ても似つかぬ日本髷の鬘姿だったからだ。常に隠れていた額が露出され、いわゆる「おでこ」丸出しのそれまで見せたことのない姿だった。

明治中期の農村の話だから日本髷は当然だったが、人気絶頂のアイドルの容姿をこれほど大胆に変えるとは意表を突かれたのだろう。しかし、澤井にしてみれば当然のやり方だった。アイドルに妥協するよりも、作品の質を高める方が優先する。それは、前出の『W の悲劇』の薬師丸ひろ子の場合でも、後に触れる原田知世や後藤久美子の場合でも厳然としたものがあった。

演出のトーンも話の展開も明治の昔を思わせる落ち着いた調子と古風な情感があり、また、回想する年老いた政夫に新国劇の重鎮・島田正吾を充てるなど重厚なキャスティングで若い主役 2 人の脇を固めた。旧家の息子との身分違いの恋を引き裂かれ、意に沿わぬ結

婚をさせられた末に病死するヒロインの儚い生涯が端然と描かれる。結果、『野菊の墓』は作品的に高く評価されるとともに、聖子の新しい魅力をファンに伝えることにも成功した。興行的にもその年の東映で3番目の入りとまずまずの成績を収めている。

ただ、松田聖子の出演作は東映から東宝へと場を変える。『プルメリアの伝説　天国のキッス』（83 河崎義祐）ではハワイの日系二世の女子大生役で、中井貴一演じるウィンドサーフィンに打ち込む青年との恋に落ちる。だが、聖子の演じるヒロインはヨットの事故に遭って亡くなり、またしても悲恋に終わるのである。続く『夏服のイヴ』（84 西村潔）の彼女は、スーパーでアルバイトをする娘。羽賀研二演じる若者と大人の男・近藤正臣の間で愛に迷うが、若者の方を選びようやく恋を成就させる。

最後の主演作となった『カリブ・愛のシンフォニー』（85 鈴木則文）では、自分探しと失踪した父親捜しのためにメキシコに旅するファッションデザイナーだ。現地の日系三世・神田正輝と結ばれるが、結婚式の朝に彼が交通事故死してしまう。東宝に移ってからの3作は、それぞれハワイ、ニュージーランド、メキシコに海外ロケを行い派手な印象を与えはするが、恋愛の運びが強引だったり事故死があまりにも唐突だったりで、『野菊の墓』を超えることはできなかった。

ことに『カリブ・愛のシンフォニー』は、同じ小林竜雄の名が脚本にあることもあり、友和・百恵の『ホワイト・ラブ』といくつか共通する設定があり似通った話になっている。にもかかわらず、百恵の演じたヒロインの毅然としたひたむきさが感じられないために、あちらが感じさせた男女の愛の味わい深さはここにはなかった。百恵と聖子の個性あるいは生き方の差はこういうところに表れていたのかもしれない。

ただしここは同じで、聖子は『カリブ…』で共演した神田正輝と実生活で結ばれる。公開の4日前に電撃的な婚約発表会見が行われた。その直前の1月にそれまで公然と交際していた郷ひろみとの破局が公表され世の中を驚かせたばかりだっただけに、大きな話題となる。2ヶ月後に結婚、翌年出産と続き約2年の休養期間があったこともあり、復帰後映画主演は途絶えた。

●吉川晃司×大森一樹三部作

そもそもが、アイドル歌手の人気に頼って主演映画を作るという発想が廃れようとしていた。

『すかんぴんウォーク』84、『ユー・ガッタ・チャンス』85、『テイク・イット・イージー』86 の「民川裕司（主人公の名前）三部作」（84～86 大森一樹　脚・丸山昇一）を東宝で連打した吉川晃司の場合、歌手デビュー曲「モニカ」は彼が映画俳優デビューした『すかんぴんウォーク』の主題歌であり、当初は俳優としての認知度の方が高く 84 年度のブルーリボン新人賞を受賞している。翌 85 年に「You Gotta Chance ～ダンスで夏を

抱きしめて～」「にくまれそうなNEWフェイス」がヒットチャート1位を獲得し紅白歌合戦出場を果たしたところからその後は歌手としての活動が中心になっていくが、あくまで出発は俳優としてだったのである。

『すかんぴんウォーク』自体、実際の吉川と同じく広島の高校3年生だった民川裕司が演劇を志して単身東京に乗り込む場面から始まる。文無しの彼が広島からのヨットに便乗させてもらい東京湾で海に飛び込み泳いで晴海埠頭に辿り着く人を喰った仕掛けは、監督・大森、脚本・丸山の新鋭コンビの面目躍如だった。夢を追って奮闘する裕司が業界の汚れた仕組みに阻まれながらも思いがけず歌手として人気スターになるものの、陥れられると未練なく見切りをつけ芸能界を去っていくのだった。

『ユー・ガッタ・チャンス』は、裕司が人気歌手として活躍中の日々から始まる。アイドルとして送る毎日に行き詰まった彼は、尊敬する映画監督（原田芳雄）に出会うことで自分を変えようとするのだった。『テイク・イット・イージー』となると、ニューヨーク公演が中止になったため北海道へと旅に出た裕司がある町で地元ボスと対決する。いずれも、芸能界の内幕話に活劇を絡めたファンタジー風青春映画である。

●菊池桃子と南野陽子

菊地桃子の場合もこれに似ている。83年15歳のときにアイドル雑誌「Momoko」のイメージガールとなるなど芸能活動を開始し、『パンツの穴』（84鈴木則文）で映画に主演デビューする。この作品は、アイドル雑誌「BOMB」の「ちょっとエッチな下半身体験」を語る読者投稿を基にし、中学生男子たちの初恋と童貞脱出願望に糞尿ネタを絡めた他愛ない学園コメディだった。その公開直後に「青春のいじわる」で歌手デビューする。

翌85年には「卒業-GRADUATION- 」をヒットさせ、その時点で史上最年少の日本武道館コンサートを超満員にするのだが、音楽界での目立った受賞歴はなく、紅白歌合戦にも出場していない。熱狂的なファンを集めたにもかかわらず、なぜか歌手としての社会的評価をそれほどには得られていない。89年には歌手業から離れ、現在まで女優として活動している。

それでも、東映のSFもの『テラ戦士　ΨBOY（サイボーイ）』（85石山昭信）に主演、海援隊の武田鉄矢が片山蒼名義で脚本を書き主演した東宝『幕末青春グラフィティ Ronin 坂本竜馬』（86河合義隆）に顔を見せた後、松竹『アイドルを探せ』（87長尾啓司）に主演する。これは人気少女漫画を原作にグアム島ロケ、菊地自身の主題歌と、青春アイドル映画の見本のような構造だったが、内容に乏しく残念な結果に終わった。

南野陽子は84年17歳のときにテレビドラマ出演で芸能界に入り、85年「スケバン刑事Ⅱ」に主演して一躍人気者となった。歌手としても85年にデビューしたがすぐにはヒ

ットに結びつかず、専らテレビで活躍した。映画『スケバン刑事』（87 田中秀夫）でも演技者としていくつかの新人賞を受賞している。

87 年から 88 年にかけては歌もヒットし「ナンノ」の愛称でアイドルの座を不動にした。その人気に乗った『はいからさんが通る』（87 佐藤雅道）は漫画原作で大正時代の恋愛を描くが、いかんせん大正とはいえ時代劇はアイドルには荷が重かったようだ。『菩提樹　ーリンデンバウムー』（88 山口和彦）も漫画原作で、「あしながおじさん」をモチーフにした話が陳腐なのがシラケさせる。

アイドル映画で精彩のなかった南野だが、90 年前後から女優業に専心するようになると、『白い手』（90 神山征二郎）、『福澤諭吉』（91 澤井信一郎）をはじめ多数の作品に主要な役で出演した。現在もテレビなどで旺盛に活動している。

●チェッカーズと中森明菜

一方、この時期にアイドル歌手として圧倒的な人気を誇ったのは、他にチェッカーズがいる。福岡県から上京した男 7 人のグループは、83 年のデビュー作「ギザギザハートの子守唄」がいきなりヒットし、翌 84 年に大ヒットした「涙のリクエスト」で紅白歌合戦に出場。解散する 92 年まで 9 回連続で登場した。

しかし映画出演は『TAN TAN たぬき』（85 川島透）、『チェッカーズ　ＳＯＮＧ　ＦＯＲ　Ｕ・Ｓ・Ａ』（86 斉藤光正）の 2 作に止まった。前者はチェッカーズ人気で興行的にヒットはしたが、狸が人間に化けてチェッカーズとして活躍するという奇想天外荒唐無稽な話、後者は働きづめのメンバーが 2 週間の思わぬ休暇を得て自由行動する中、黒人の親子と知り合ったボーカルのフミヤが渡米して歌いに行くニューヨーク・ロケ作品と、いずれも他愛ない内容だ。

82 年に歌手デビューし、「少女 A」のヒットでいきなり注目され翌 83 年の「禁区」で紅白歌合戦に初出場しその後 6 回連続出場したアイドル中森明菜も、映画は近藤真彦と共演で主演した『愛・旅立ち』（85 舛田利雄）があるだけだ。

●ロマンポルノ出身の監督・脚本コンビで、女優・小泉の魅力が開花

同じく 82 年に歌手デビューした小泉今日子は、84 年の「渚のはいから人魚」を大ヒットさせて紅白歌合戦初出場。以後「ヤマトナデシコ七変化」「なんてったってアイドル」などヒット曲を連発して 88 年まで 5 回連続出場する。「キョンキョン」の愛称で広く人気を集めた。現在は女優として活躍する彼女でさえ、アイドル時代の青春映画となるとわずか 2 本しか出ていない。

『生徒諸君！』（84 西河克巳）は、少女漫画が原作で小泉は双子の姉妹を二役で演じる。ヒロインがソフトボール部で活躍する場面は勢いがあっていいのだが、彼女の双子の姉は難病で早世する。明るい面と暗い面の双方を小泉が演じているわけで、そこがなんとも中途半端な感じになり、百恵映画などアイドル映画を多数撮ったベテラン西河監督をもってしても、彼女の魅力を弾けさせるわけにはいかなかった。

もう１本の『ボクの彼女に手を出すな』（86 中原俊　脚・斎藤博＋中原俊　原・桑原譲太郎）は、ツッパリ娘のヒロインが富豪の家の家庭教師になったことから殺人事件や誘拐事件に巻き込まれるという、これも陰気な話である。だが日活ロマンポルノ出身の若い監督、脚本家コンビは健闘し、小泉らしさを出すことにはなんとか成功していた。わたしは、当時それを次のように評している。

【なにしろ暗い話だ。ヒロインと石橋凌の弁護士はみなしごだし、富豪の遺した異母姉弟である森下愛子と幼い男の子もそれぞれ天涯孤独のようなものだ。その他の登場人物も皆、家族を持たない者ばかりで、わずかに妹分・金子美香だけが帰ることのできる家庭を持っているに過ぎない。いったいこんな孤独な人間ばかりのドラマというものがあるだろうか。
そのうえ、中原俊監督（脚本も）＝斉藤博脚本のコンビは、これでもかこれでもかとばかり物語をさらに暗い方向へ持っていく。「この世には利用する奴される奴のどちらかしかいない」という弁護士の科白に象徴されるように、利用、裏切り、虚偽、陥穽といった背信行為に満ちている。誰もが他人に冷たくて、男の子と逃げるヒロインが食事代にも事欠く窮地に陥っても、手を貸してくれる者とてない。
そんな、いわば愛情の不毛状態が、いささかの手加減もなく冷徹に描き出される。もし主演女優がこの人でなかったら、陰惨のきわみになっただろう。そう、小泉今日子だからこそ、娯楽映画として成り立った。もちろんそこまで計算した上で、作者たちはこんな暗い物語にし得たのだろう。小泉今日子には、不毛を突きぬけるだけの明快なパワーがある。ラストの彼女の笑顔ひとつで、それまでの悲惨さを一気に解消することができるのだ。ヒロインと男の子の間に成立した真の愛情が、わだかまっていた暗雲を吹き飛ばしカタルシスを与えてくれる。
中原俊監督、斉藤博脚本ともにメジャーのお正月映画に初めて起用されたというのに、安全策をとらず小泉今日子主演でなければ作れない題材に敢然と作品に挑んだ闘志を、大いに買いたい。】（B 級映画評論家通信 87 年 1 月号）

●映画では弾けなかったおニャン子

こうしてみると、薬師丸ひろ子の登場で始まった 80 年代はアイドル歌手の人気に頼るのでなく、映画スターを育てることによってアイドル青春映画を作っていくという時代だったように思える。アイドル歌手の時代は 80 年代で終わったとするのが、アイドルの歴

史における大方の見方である。小泉今日子や薬師丸ひろ子を起用するなど、東北の復興と絡めて「アイドルになる！」との少女たちの願いをテーマにし、2013 年に大きな話題を呼んだ NHK の朝ドラ「あまちゃん」で、懐かしの時代として設定されたのも 80 年代だった。

70 年代に西城秀樹、郷ひろみ、野口五郎の新御三家、森昌子、桜田淳子、山口百恵の「花のトリオ」を頂点にして隆盛したアイドル歌手ブームは、80 年代に入るとさらにエスカレートする。アイドル誕生を当て込んだ商業主義が過熱し、最初からアイドルにすることを狙った巨大宣伝プロジェクトが横行したり、TBS「ザ・ベストテン」（78～89）や日本テレビ「ザ・トップテン」（81～86）、「歌のトップテン」（86～90）といったテレビのランキング歌番組への出演狙いや年末の音楽賞レースの賞争いが過熱したりする中で、短期間に人気を燃え上がらせ短期間で消えるアイドルを次々と生み出した。そのためアイドル歌手の数は増えたものの、映画という他ジャンルにまで長期にわたって君臨する者は少なくなっていった。

バブル期に入ると、後のモーニング娘。や AKB48 のような大量生産、大量消費形式のアイドルが誕生する。85 年にテレビ番組「夕やけニャンニャン」から登場した「おニャン子クラブ」は、AKB の仕掛け人である秋元康が関与していることからも、現在の動きへの先き駆けだったと思える。女子高生の中から選ばれ「会員番号」を付されたメンバーは当初 11 人、87 年に解散するまで延べ約 50 人が入れ替わり立ち替わり加入、「卒業」を繰り返した。

ユニットとしての歌手デビュー曲「セーラー服を脱がさないで」が大ヒットし、その後は各メンバーがソロまたはユニット内に作られた小グループでヒット曲を連発する。しかし、主演映画『おニャン子ザ・ムービー　危機イッパツ！』（86 原田眞人）は、グループサウンズ映画の頃によくあったような、ライブコンサートと彼女たちの日常をからめた安直な構成だったこともあり、不入りに終わる。

その後、メンバーの国生さゆりが東宝『いとしのエリー』（87 佐藤雅道）に主演、高井麻巳子が東宝『恋する女たち』（87 大森一樹）、新田恵利が東映『ちょうちん』（87 梶間俊一）に出演しているが、おニャン子ブームが去ったこともあり特にインパクトを与えなかった。「おニャン子クラブ」というシステム自体、2 年半の短命で消滅する。

●韓国で最初に人気を博した女優・中山美穂

歌手デビューしてすぐにレコード大賞最優秀新人賞、紅白歌合戦出場、そして映画主演の黄金 3 点セットを獲得して、アイドル青春映画の系譜に名を残すという御三家、新御三家、「花のトリオ」以来のスタイルを踏襲する正統派歌謡アイドルの路線は、いよいよ最後の時期を迎えつつあった。女性では中山美穂、男性では光 GENJI が「最後のスーパー

アイドル」などと呼ばれている。

中山美穂は、85 年に 14 歳でテレビドラマ「毎度おさわがせします」にツッパリ少女役で出演し、たちまち注目された。同年「C」で歌手デビューしレコード大賞最優秀新人賞を獲得する。紅白歌合戦には 88 年から 94 年まで 7 年連続出場し、歌手として「世界中の誰よりきっと」などのヒット曲を連発する一方、テレビドラマでの活躍が顕著で 92 年頃までほとんど切れ間なく連続ドラマの主演が続いた。

映画には、東映『ビー・バップ・ハイスクール』（85 那須博之）、『ビー・バップ・ハイスクール　高校与太郎哀歌』（85 那須博之）に準主役の「泉今日子」役で初出演した。その後東宝『どっちにするの。』（89 金子修介）で主演するが、彼女の演じるヒロインは OL で、どちらかというと青春映画というよりは会社を舞台にした恋愛コメディと言えるものだったし、次の主演作『波の数だけ抱きしめて』（91 馬場康夫）もヒロインをマドンナ視している若者たちが湘南海岸でミニ FM 放送局を成立させる過程に主眼が置かれており、アイドルの存在を前面に押し出す華やかさには欠けていた。

中山の映画でのめざましい成功は、大人の恋愛映画『Love Letter』（95 岩井俊二）まで待たなければならない。この作品でブルーリボン主演女優賞ほか多くの女優賞を得た。とりわけ、日本映画解禁直後の 99 年に公開された韓国で日本映画として初めての大ヒットを記録し、最初に人気を博した女優となっている。その後 02 年に小説家の辻仁成と結婚しパリに移住したための芸能活動休止を経て、韓国人監督による『サヨナライツカ』（10 イ・ジェハン）が女優復帰作となった。

●最後の青春アイドル映画

男性アイドルの供給源としての地位を確立していたジャニーズ事務所からは、少年隊に続き男闘呼組（おとこぐみ）（成田昭次、高橋一也〈現・和也〉、岡本健一、前田耕陽）が登場した。85 年に結成され、ロックバンドとしての性格が強かったためにテレビなどでの本格的歌手デビューは 88 年となったが、それ以前から CM やテレビ番組でアイドル視されていた。

東宝『ロックよ、静かに流れよ』（88 長崎俊一）でいきなり主演の映画デビューし、自分たちを投影した田舎の高校生ロックバンド役を演じた。彼らの特長は音楽だけでなく演技面の才能にも恵まれていたところだ。これに先立ち、前田耕陽は前述の国生さゆり『愛しのエリー』に単独出演しているし、グループ解散後は前田だけでなく、高橋、岡本も役者として息長く活動している。『ロックよ～』は自主映画時代から青春の描き方に定評のある長崎監督ということもあり、映画はキネマ旬報ベストテン 4 位という高評価を受けた。

現実の自分たちをオーバーラップさせるミュージシャン役で映画デビューさせ、その直後に CD デビューというのは吉川晃司と同じ戦略だった。その初 CD「DAYBREAK」は

たちまち大ヒット、88 年、89 年と紅白歌合戦に出場する。以後は音楽活動にほぼ専念し、映画やテレビへの出演は途絶える。

ジャニーズ事務所で男闘呼組に続き売り出された光 GENJI は、光（内海光司、大沢樹生）と GENJI（諸星和己、佐藤寛之、山本淳一、赤坂晃、佐藤敦啓）の複合ユニットである。87 年に歌手デビューするや、「STAR　LIGHT」「ガラスの十代」と立て続けに大ヒットを飛ばし、翌 88 年の「パラダイス銀河」などにより、この年の年間トータルセールス 1 位アーティストの座に就く。そして、新人賞を飛び越し、この年の日本レコード大賞でいきなり大賞を受賞した。初出場した紅白歌合戦では、ヒット曲の数が多すぎて「パラダイス銀河」を中心に 4 曲を「光 GENJI '88 メドレー」で披露している。紅白には、93 年まで 6 年連続で出場した。

そうした人気絶頂期に主演した東宝 89 年のお正月興行作品は、より年長である光の 2 人が『…これから物語　～少年たちのブルース～』(88 榎戸耕史　脚・森治美＋中村功一)、中高生年齢の GENJI が『ふ・し・ぎ・な BABY』（88 根本順善）の 2 本立てである。この番組は、青春アイドル映画最後の大ヒットを記録した。日本映画製作者連盟の「日本映画産業統計」によると、たのきんトリオ、薬師丸ひろ子、原田知世、後述の仲村トオルたちがうち立ててきた興行収入 10 億円以上の大ヒットをアイドルとして最後に果たしたのが光 GENJI ということになる。

『…これから物語　～少年たちのブルース～』は、作品としても単なるアイドル映画には止まっていない。この「最後の青春アイドル映画」の大ヒット作を、当時のわたしはこう評している。

【『・ふ・た・り・ぼ・っ・ち・』でさっそうとデビューした榎戸耕史監督の第二作、早くもアイドル映画という難しいジャンルに挑んでみせた。
「ＧＥＮＪＩ」に比べると年長組の「光」の二人は、スターらしい輝きを持っている。それをそのまま、夢のような高校生活を送る二人の少年に当てはめてあり、片方は大企業グループの若き総帥として君臨し何でも思いのままになる立場、もう片方は徒手空拳ながらスポーツ万能でモデルになるくらいのルックスを持ち可愛い従妹の少女と二人でマンション暮らしの自由な生活をしている。どちらも両親を亡くしているが、それとてここでは、誰からも指図されず好きなように生きられる好材料になっている。
華奢な内海光司を金持ち、美丈夫の大沢樹生を学園の人気者に配し、立場の違う両者の間に友情を成立させてみせるが、金持ち少年の豪華な弁当をいくらでも食べられろうなスポーツマンがつけ狙うという接点が自然で、素直に共感できる。恵まれた生活ぶりに厭味がなく、彼らの幸運な人生も、それゆえの不幸な面も、抵抗なく受け止められる。

前作以上に巧みな演出が目立つ。巻頭、大型自家用車で通学する少年と、バイクで通学する少年とを別々に紹介しておいて違う道から来た双方を同じ道路で並ばせ信号待ちで同画面に入

れる呼吸がぴったりだし、二人がゲームセンターで競馬ゲームに興じる姿を機械仕掛けの競走馬の模型の走行からひとりの顔がそこにあるという画面も卓抜だ。

二人が夜の舗道でゲームセンターのコインを山と積んで遊びながら会話するシーンは、人恋しい気分にあふれ心惹かれる雰囲気を漂わせる。ことに、友人の隠していた正体を知った少年が、手にしていた一杯のワインを相手の頭から浴びせ、グラスを床に叩きつけて割り、テーブルを思い切り叩いて立ち去る。

ただ、話の行く手には限界があって、どちらの少年の夢も中途半端、金持ちの方はデザインの勉強に海外に出るといってもヘリコプターで豪華客船に飛び乗って優雅な旅のようだし、もうひとりのモデル修業だって企業グループの庇護の下でのものになろう。ただ、二人はそんな枠組の中にいることを自覚し、それでも自分なりにもがいてみようと思う。その連帯感が、ナスカの地上絵を使ったメッセージ交換になる。

枠の中にいる青春をアイドル映画という枠の中で扱う試みが成功しているとともに、描写に格調を感じさせる一篇だ。】（B 級映画評論家通信 89 年 1 月号）

ただ、光 GENJI の映画出演はこれで終わってしまい、その後は各メンバーが時折単発で出演する形となる。ユニットも、95 年には解散した。

●原田知世の時代

一方、日本映画界の方は、黄金時代を頂点として衰退の一途を辿り、大映の倒産、日活のロマンポルノ路線への転向に至った 70 年代初めをどん底にして、横這いの小康状態を迎えていた。76 年には『犬神家の一族』（76 市川崑）で角川書店が前出の角川春樹事務所という形で参入、徳間書店も『金環蝕』（75 山本薩夫）以来いくつもの大作映画に出資して関わるようになる。また、80 年代後半になると、バブル景気の余波で一般企業の映画への出資が激増する。映画界にも、バブルの恩恵は訪れていた。

角川春樹事務所が薬師丸ひろ子を見出したように、日本映画界も新しい視点から若い映画スターを探し出そうとしていた。松竹、東宝、東映という既成の映画会社がニューフェイス募集という形で新人を集められるご時世でもなかったし、吉川晃司のように所属事務所から提供を受けた逸材は、事務所の意向で別ジャンルに向かうのを甘受せざるを得なかったからである。

角川春樹事務所が薬師丸の次に発掘したのは原田知世だった。82 年に行われた角川・東映大型女優一般募集オーディションで特別賞を受けた 13 歳の少女は、すぐにテレビドラマ「セーラー服と機関銃」「ねらわれた学園」に、映画で薬師丸が演じた役で主演。翌年夏、薬師丸主演『探偵物語』との 2 本立て公開された『時をかける少女』（83 大林宣彦　脚・

剣持亘　原・筒井康隆）で映画主演デビューを果たす。

筒井康隆の名作ジュブナイルを映画化したこのあまりにも名高い作品は、97 年に新人・中本奈奈で角川春樹監督がリメイク、06 年に押田守監督がアニメ化、10 年にはアニメ版の声を担当した仲里依紗主演で谷口正晃監督が再度リメイクしていることもあり、今さら説明の必要はあるまい。高校生の少女がタイムスリップする中で繰り広げる幼くも美しい恋の物語だ。恋の相手の少年は、『狙われた学園』の薬師丸の相手役オーディションで選ばれ出演した高柳良一である。

『探偵物語』『時をかける少女』の番組は前述のように当時の薬師丸主演作の興行的強さで年間 2 位の成績を収めたが、そこに無名の新人が主演した『時をかける少女』が寄与している部分も決して少なくはないと推察できる。なぜなら、薬師丸が歌った『探偵物語』主題歌が 84 万枚の売り上げといわれるのに対し、原田の歌った松任谷由実作詞・作曲の同名主題歌は 59 万枚を売り上げているからだ。また、その年のキネマ旬報ベストテンで『探偵物語』25 位、『時をかける少女』15 位とベストテン圏外だったにもかかわらず、読者のベストテンでは『探偵物語』10 位を大きく引き離して 3 位に入っている。

幾多の記憶に残る大林作品を生んだ自らの故郷尾道を舞台に、さまざまな映画的技法をちりばめて原田の魅力を引き立てた大林監督の後押しもあったろうが、原田知世はこれ 1 作で一気にアイドル女優のひとりとなった。『汚れた英雄』82 で既に監督を経験していた角川春樹は、原田の次の主演作『愛情物語』の演出を自ら手がける。これ自体、彼女に対する角川の大きな期待を裏付けていた。

角川書店の看板売れっ子作家・赤川次郎原作の『愛情物語』（84 角川春樹）は、実の両親を知らず養母との二人暮らしでバレエに打ち込む少女が、毎年誕生日に届くバラの花を手がかりに親捜しの旅に出る。純粋な少女が大人たちの事情を知る旅をして成長していく物語だ。これも、薬師丸ひろ子の『メインテーマ』との 2 本立てで夏休み向けに公開されこの年 2 位の興行成績をあげる。薬師丸・原田の組み合わせの強さは改めて実証された。

そこでこのコンビは東映の 85 年お正月番組に起用された。薬師丸は既に『里見八犬伝』で前年のお正月の顔となっていたが、原田は初の経験である。『W の悲劇』と組んだのは『天国にいちばん近い島』（84 大林宣彦）。66 年の大ベストセラーになった作家・森村桂の旅行記が原作で、南太平洋ニューカレドニアへの旅がテーマだ。

無口でおとなしい娘が、小説家だった父の死に直面しその愛する地だった南の島へ一人旅に出る。日本人旅行者やそこに住む日本人たちの人生模様に触れ、また日系三世の若者との淡い恋を経験し、彼女は自立して生きていくだけの自信を得て帰国するのだった。ベテラン俳優連の演じる大人の人生の間で成長する娘を演じる原田はまだ 16 歳、原作者が実際に旅をした年齢より 8 歳も若い。そこにやや無理があった。

むしろ、『時をかける少女』の相手役だった高柳良一が演じる若者との初々しい出会い

や別れの方が彼女のその時点での等身大のものになっていた。高柳は、慶應義塾高校在学中に選ばれて薬師丸、原田の両方の相手役を務めた若者として、全国の同世代からひどくうらやましがられたに違いない。その後もいくつかの角川映画に出演し、大学卒業後引退、角川書店に入社して編集者になった後、現在はニッポン放送に勤務している。

お正月番組『W の悲劇』『天国にいちばん近い島』は期待通りの興行成績を収めたが、その後、薬師丸は角川春樹事務所を離れ独立する。今度は原田が角川映画の青春映画路線の中心になる役目を背負うことになった。アイドル原田知世の正念場となったのが、次の『早春物語』（85 澤井信一郎　脚・那須真知子　原・赤川次郎）である。東映から東宝に配給元が変わり「角川映画 10 周年記念映画」と冠され、志穂美悦子主演の『二代目はクリスチャン』（85 井筒和幸）との 2 本立て番組のメインを張る作品となった。

高校 2 年から 3 年になる 17 歳の春休みに繰り広げられる物語だ。原田の実年齢とぴったり合っている。写真部で活動するヒロイン瞳は、母を亡くし父（田中邦衛）と二人暮らしだ。父親は再婚が近く、仲良しの同級生・麻子（仙道敦子）には大学生の恋人ができ、瞳はなんとなく所在ない。そんなとき、四十過ぎの商社マン・梶川（林隆三）と偶然知り合いになる。

瞳は彼に対し好奇心を抱き、アメリカ駐在から一時帰国していた梶川の会社を訪ね、ビジネス絡みのパーティーに出て大人の世界を垣間見た。その梶川の若き日らしい姿を母の遺したアルバムの写真の中に見つけた彼女は、彼が母の昔の別れた恋人だと知る。落ち着かぬ気持のまま梶川とドライブに行った瞳は、慕情を抑えきれず彼にさらに接近した。母とのことを問い質し、別れがやむを得ない事情によるものだったことがわかる。

梶川は会社内で陥れられ孤立しているときに現れた瞳に、芯から惹かれていたが、大人の分別で彼女の父に経緯を話し、少女の暴走する恋心を鎮めようとする。そしてアメリカへひとり去っていく。そのとき、空港に瞳が駆けつけた。二人は見つめ合い、見送る彼女はすべてを噛みしめた上で梶川に別れを告げる。

春休みが終わり、恋人と初体験したことをウキウキ打ち明ける麻子を前に、瞳は自分がそれよりもっと重い体験をし、もっと大人に近づいたことを感じるのだった。

『愛情物語』でも『天国にいちばん近い島』でも、大人たちの人生遍歴に触れ何かを感じるに止まっていた原田の演じるヒロインは、ここでは背伸びしながらではあっても正面からそれらに対峙する。梶川と恋愛するだけでなく、再婚する父親やその相手の思いを自分なりに理解しようとする。亡き母の過去にも向き合う。17 歳の少女の自意識からすると極めて難しい行動をするこの役を、原田知世は懸命にこなそうとしている。

おそらくここで初めて演技について厳しい演出の洗礼に遭ったのだろう。澤井監督の注文は容赦なく、メイキング映像を見ても、原田の直面した状況の緊迫度は窺える。経験の浅い彼女としては、当時「監督との確執」と報道されたほどの当惑もあったに違いない。

しかし、結果はみごとな作品として成り立った。キネマ旬報ベストテンの 9 位にランクされ、読者のベストテンでも 10 位に選ばれる。興行成績でも、9 月中旬公開という中途半端な時期でありながら、正月の『W の悲劇』『天国にいちばん近い島』（年間 4 位）の 8 割の配給収入を獲得し、年間 6 位の座を占めたのは上々の出来だった。原田知世の代表作と言っていいだろう。主題歌「早春物語」もヒットし、この年の紅白歌合戦に出場した。

残念なのは、その後の展開である。次の主演作は北方謙三のハードボイルドを映画化した『黒いドレスの女』（87 崔洋一）になり、「無意識に男の心を惑わせる女」というキャラクターのヒロインを演じた。だが、黒いドレス姿でバーに現れ、マルガリータを注文しそこで働かせてくれと言う女、荷物には拳銃が入っている……となると、この役は 19 歳になったばかりの原田にはどうしても荷が重い。

バーの主人に永島敏行、彼の相棒の弁護士に時任三郎といったあ若手はともかく、彼らが組んで外国へ逃亡させようとしているヤクザが菅原文太、逃亡ルートを握る男に室田日出男、刑事に成田三樹夫、悪徳代議士に中村嘉葎雄の顔ぶれが揃うとなると、どう見ても渋いハードボイルド劇の様相を呈してくる。彼らを翻弄し上前をはねる謎の女を演じるには、あまりにも可憐に過ぎた。それまでの原田知世主演作のヒットぶりからすると、物足りない興行成績に終わっている。

ほどなく、薬師丸ひろ子と同じように角川事務所を辞める。前年いきなり『彼のオートバイ、彼女の島』（86 大林宣彦）に主演して角川映画からデビューした姉・原田貴和子と行動を共にして独立、東宝『私をスキーに連れてって』（87 馬場康夫）、『彼女が水着にきがえたら』（89 馬場康夫）に主演する。

時は 86 年から 91 年まで続いたバブル経済のまっただ中。普通の大学生まで欧米へ海外旅行に行き、ブランド物を買い漁った時代である。スキーも、「水着にきがえ」てのビーチリゾートも、若者たちに手の届かぬものではなかった。わたしは 88 年に公務員の民間企業研修第 1 号で日本橋の三越本店に 1 ヶ月間勤務し売り場にも立ったが、株で潤う近所の兜町の若い社員や OL がブランド品のゴルフセットを買いに続々来店していた。

成蹊大学で安倍晋三首相と同級で親しい友人だという馬場康夫監督は、現在も青年マンガ週刊誌に連載中の情報ギャグ四コマ「気まぐれコンセプト」の作者集団ホイチョイプロダクションを率い、バブル期のメディアに旋風を巻き起こしていた。07 年には阿部寛主演で『バブルへ GO!! タイムマシンはドラム式』（07 馬場康夫）という当時にタイムトラベルする映画を作っているほどの「バブルの申し子」だ。

当然原田主演の両作も、バブルの匂い漂う青春風俗が描かれている。中山美穂が主演した前出の『波の数だけ抱きしめて』もそうだが、馬場監督が力を入れるのは 80 年代の若者風俗や流行であって、人間同士の青春模様ではない。

そのため 2 作ともそこそこの観客動員を得たとはいえ、それは原田のアイドル女優としての人気よりも、それまでの日本映画にない情報カタログ的な要素の目新しさによるものだった。また、ヒットといっても興行収入は、角川映画で薬師丸や原田がヒットさせた作品よりは一桁下でしかなく、アイドルがファンを吸引するときの迫力とは別ものに思えた。

また映画会社の資本の論理からしても、バブル期の異常なまでの豊かさとホイチョイプロダクションなどメディアが煽った「金さえ出せば何でもできる」式の消費至上主義は、青春アイドルをさえ、ヒットを狙う映画の材料として消費してしまうようになっていったのである。製作費調達に苦しんできた日本映画界には救世主の役割を果たしたバブルも、アイドル青春映画にとっては、その存在を危うくする契機となってしまった。

もちろん、原田知世がバブルの時代に「消費」されたのは、あくまでアイドルの部分であり、女優としての彼女はその後も活躍を続けている。『さよならCOLOR』（05 竹中直人）、『紙屋悦子の青春』（06 黒木和雄）などの他、最近では『しあわせのパン』（12 三島有紀子）といった多様な主演作がある。